

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24243062

研究課題名(和文)総合大学におけるダンス表現教育プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of Undergraduate Dance Education Program

研究代表者

岡田 猛 (Okada, Takeshi)

東京大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：70281061

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 33,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ダンサーが実際にダンスパフォーマンスを行っている場面、表現の創作を行っている場面に関する詳細かつ実証的なデータを収集し、ダンス表現において重要とされる要因を解明すること、そしてその要因に基づいたダンス表現教育プログラムを開発し、総合大学において実施・効果の検証を行うことであった。そのため、(1)エキスパートダンサーに対するインタビュー、(2)エキスパートダンサーの振付創作場面・表現獲得場面を対象とした長期的なフィールドワーク、(3)即興表現場面を対象とした実験、(4)示唆された要因に基づいたダンス表現教育プログラムの開発とその実施・効果の検証、に取り組んだ。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to collect detailed and empirical data related to the scene of dancers' actual dance performance and creation of expression in order to identify important factors for dance expression. We also aimed to develop and test undergraduate dance education programs based on the empirical findings. For its purpose, we conducted (1) interview with expert dancers, (2) longitudinal fieldwork of scenes of expert dancers' creation of choreography and acquisition of expression, (3) experiment on improvised expression, and (4) development and testing of undergraduate dance education programs based on the empirical findings.

研究分野：社会科学

キーワード：教育系心理学 創造性 ダンス

1. 研究開始当初の背景

日本の総合大学では知的教養として芸術関連科目が開講されているが、そこでは美術史や芸術学等の知識の獲得が目指され、芸術を専攻としない学生が実際に身体を動かして芸術表現を学ぶ機会はほとんどない。現況では大学の芸術表現教育は、芸術学部や教員養成系学部の芸術専攻学生のためのものに限られている。

我々は従来の「知的教養」と対比して、実際に創造や表現に携わることによって学ぶことのできる創造活動に関する知識を「創造的教養」、そのような教養を持つ人を「創造的教養人」と呼び、その育成の重要性を指摘した(縣・岡田, 2010)。創造的教養人の育成においては、芸術を専攻としない総合大学の一般学生を対象にすることがとりわけ重要であると考えられる。なぜなら総合大学の卒業生は、社会の様々な領域で中核的な役割を果たすことが期待され、そのような人々が創造的教養を有することは、創造的文化の醸成や創造的な師弟の育成に重要な役割を果たすと考えられるからである。

芸術を先行する学生と一般的な学生の間には、学生目標やモチベーション、技術、学習過程などにおいて大きな差異が存在するため、芸大予備校等で既に基礎技術を獲得した学生を対象にした専門教育を一般学生に直接応用しても十分な成果は上がらない。一般学生のための表現教育を充実させるためには、まずその教育実践に関する実証研究を行う必要がある。そのような考えに基づき、我々はこれまで総合大学における表現教育の実践研究を積み重ねてきた(縣・岡田, 2009; 2010a; 2010b; 中野・岡田, 2012)。中でも2011年度前期に東京大学教養学部においてプロの振付家を招いて開講した即興ダンス表現の授業では、プリポスの質問紙調査の結果から、ダンス未経験の学生達が内的イメージを利用した表現の仕方を学び、ダンスを楽しむようになったこと、他者とのコミュニケーションスキルが向上したこと、自身の身体に愛着を感じるようになったこと、他者とのコミュニケーションスキルが向上したこと、自身の身体に愛着を感じるようになったことが明らかになった。しかし同時に、学生達はより良い表現を行うためにダンス技術を身につける必要性も感じるようになっていた。

この知見は、総合大学の芸術表現教育プログラムにおいて自己表現を促す指導に加えて、技術を習得する指導も重要であることを示唆している。そのため、本研究では、技術獲得の支援と技術に根ざした表現の支援の方法を、基礎研究(技術の分析に焦点を当てた研究)と、実践研究(指導方法に焦点を当てた研究)の2つの研究のサイクルを通して検討していくこととした。本研究では、ダンス表現教育を対象領域として取り上げ、特にコンテンポラリーダンスとストリートダン

スの即興について研究を行った。コンテンポラリーダンスにおいてもストリートダンスにおいても新奇かつ独創的な表現が重要とされるため、体系化された形式美が重要とされるバレエ(Carine & Mackrell, 2000)などのダンスとは異なり、技術を利用しながら自ら工夫して即興的に表現を生み出していくことが必要となる。即興表現の学習は、コミュニケーションスキルの向上や自己発見(Bailey, 1980; 中野・岡田, 2012; 清水・岡田, 2011)をもたらすことが指摘されているため、一般学生のための表現教育に適した題材であると思われた。

2. 研究の目的

上述した枠組みを用いて、本研究では、実際にパフォーマンスを行っている場面、表現の創作を行っている場面に関する詳細かつ実証的なデータを収集し、ダンス表現において重要とされる要因を解明すること、そしてその要因に基づいたダンス表現教育プログラムを開発・実施し、教育効果の検証を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の通り、1)ダンス表現において重要とされる要因に関する実証研究(研究1から研究3)と、2)研究1から研究3の知見に基づくダンス表現教育プログラムの開発・実施・効果の検証(研究4)、という大きく2つの観点から研究を実施した。

研究1: 表現の創作・表現の実践に関するインタビュー(清水・岡田, 2013)
研究2: 振付創作過程、表現の創作過程を検討する縦断的なフィールドワーク(中野・岡田, 2015; 清水・岡田, 2015)
研究3: 即興表現場面を対象とした実験(清水・岡田, 2013, 2014, 2015)
研究4: ダンス表現教育プログラムの開発と実施・効果の検証(中野・清水・岡田, 2015; Nakano, Shimizu, & Okada, 2016)
各サブプロジェクトの詳細を以下に示す。

研究1

ここでは、コンテンポラリーダンスのエキスパート8名、ストリートダンスのエキスパート7名を対象に、作品・表現のコンセプトや創作方法、創作時に重視していることについて尋ねるインタビューを行った。ここでは、必要に応じて実際に表現を行っている際のビデオ映像等を見せながら、ダンスパフォーマンスに関する創作の意図や注意を向けていたもの、創作方法等の説明を求めている。これらの回答を書き起こし、内容を分類・集計・抽出等することでダンスを行う際に熟達者が重要視している要因を検討した。

研究2

研究1のインタビューで得られた知見につ

いて、実際にダンサーがインタビューで見られた取り組みを行っているのか、振付創作、表現獲得は具体的にどう営まれていくのか、検討を行うために、研究2としてエキスパートダンサーを対象にしたフィールドワークを実施した(コンテンポラリーダンサー1名、ストリートダンサー3名)。まず、コンテンポラリーダンサーを対象とした振付創作過程の検討では、ダンサーが振付を創作していく過程について参与観察を行い、その過程についてビデオカメラによる撮影を行い、振付が生成され変化して行く様子を記録した。また、振付創作後にダンサー本人に対する回顧的なインタビューを映像記録を見せながら実施し、各場面でどのようなことを考えて振付を創作していたかを検討した。以上の、身体運動における変化、内省報告における変化という両過程を検討していくことで、振付創作過程について詳細な検討を行った。

次に、ストリートダンサーを対象とした表現獲得過程の検討では、ダンサーが領域に存在する技術を獲得していく過程について、5ヶ月に渡る参与観察を行い、ビデオカメラによる撮影を行うことで、表現の獲得が進行していく様子を記録した。また、参与観察後にダンサー本人に回顧的なインタビューを実施し、表現獲得中にどのようなことを考えていたかを検討した。そして、振付創作過程と同様に、身体運動における変化、内省報告における変化の両過程を検討し、表現獲得過程について詳細な検討を行った。

研究3

そして研究3では、研究1、研究2で得られた知見を考慮した即興表現場面の実験を実施した。ここでは、大きく2つの実験に取り組んでおり、まず1つ目として、音楽のダンサーに与える影響に着目した実験を実施している。この実験では、リズム・テンポの異なる音楽を刺激として用い、ダンサーの情動やリズム感覚を変化させることで表現に生じる影響を検討した。身体運動としては、通常のダンスパフォーマンスに加え、特にストリートダンスで重要とされている膝の屈伸運動を利用し、音楽によって生じる変化を同定した。なお分析については、モーションキャプチャーシステムにより測定した身体運動指標(膝関節角度空間など)を位相に変換し、周期的な運動の変化を同定すると共に、内省報告等により心理指標も取得することで、複数の観点から検討を行っている。

次に2つ目として、ダンサーの体性感覚(固有感覚)に着目した実験を行った。実験では、圧迫刺激を行う、課題を行ったイメージをしてもらうといった手法を用いて体性感覚情報を操作した条件と、通常通り表現を行う条件とを比較し、体性感覚情報が表現に与える影響を検討した。分析については、音楽に着目した実験と同様に、身体運動指標と心理指標を用いてパフォーマンスの変化を同定した。

最後に研究4では、研究1から研究3によって得られた、ダンス表現を行う際に重要とされる要因(音楽や実際に身体運動を行った際の感覚、ダンスパフォーマンスを生成し、実施する際に多様な観点に着目すること、など)を考慮し、ワークとして取り入れたダンス表現教育プログラムを作成し、総合大学の授業において実施した。ここでは、上記した要因を踏まえたダンス表現の授業に長期間に渡って取り組むことで、ダンスや芸術表現に対する興味・関心に変化が見られること、また自身の周囲にある環境や他者について多様な観点から捉え直すようになること、その結果として自己発見やコミュニケーションが促進されることを想定している。授業は、半学期に渡る通常授業と、数日間に渡る集中講義という2つの枠組みの中で実施された。授業開始時から終了時まで参加した学生は、それぞれ18名、9名である。教育効果については、授業前後に行った質問紙や、特定のワークにおけるダンスパフォーマンスの変化、各授業におけるコメントシートなど複数の観点から分析し、学生の変化を検討した。

4. 研究成果

研究1の成果

コンテンポラリーダンスのエキスパート8名、ストリートダンスのエキスパート7名を対象に行ったインタビューからは、実際に表現を行っている場面においてダンサーが音楽や他者などの様々な要素を考慮していること、それらの要素から影響を受け、パフォーマンスを変更する様子が見られること、そして他者の突然の振る舞いや自身の体勢の崩れといった予想外の状況を積極的に利用しながらダンスパフォーマンスを行っていることが示唆された(清水・岡田, 2011, 2013)。即興的な状況において、熟達者は周囲の状況や環境の変化を利用した振る舞いを見せることがこれまで様々な領域において逸話的に示唆されていたが(Bailey, 1981)、ダンスという身体表現芸術においても同様の過程が見られること、特に音楽や他者の振る舞いといった不確定な要因を積極的に利用している可能性が示唆された。

研究2の成果

研究2では、コンテンポラリーダンサー1名、ストリートダンサー3名を対象とした数日、数ヶ月に渡るフィールドワーク(ビデオ記録、内省インタビュー等の収集)を行い、振付創作過程、表現獲得過程をそれぞれ詳細に検討した。身体運動、内省報告それぞれを分析した結果、振付創作では、ダンサーは周囲にある様々なものに刺激を受け、考慮しながら創作していく過程が見られること、振付創作が進展するに従って、それらの考慮する内容が大きく変化していくことが示唆された(中野・岡田, 2015)。この知見は、研究1においてダンサーが周囲の状況や環境を積極的に利用しながらダンスパフォーマンス

を行っていた、という知見と強い関係性があると考えられる。また、表現獲得においては、ダンサーは獲得中の表現を利用してどういった新しい表現を生成出来るか、パフォーマンスの中でその表現をどのように利用していくのか、といった多様な観点を考慮しながら探索的に表現を獲得していくことが示唆された。また、表現を実施した際の体性感覚や以前実施した表現の内容を参考に、さらに表現を発展させていく様子も示唆されている(清水・岡田, 2015; Shimizu & Okada, 2015)。

研究3の成果

研究3では、即興表現場面において音楽の与える影響、体性感覚の与える影響に着目した2つの実験を実施した。データの膨大さや分析の困難さから、現在まだ分析途中の部分も見られるが、身体運動指標や心理指標を分析した結果、音楽のリズムやテンポに合わせてダンスパフォーマンスや膝の屈伸運動の様相が変化すること、特に突然生じた音楽の変化に対してエキスパートダンサーがより柔軟に対応していたことなどが示唆されている。また体性感覚についても、感覚が得られない条件では、手がかりが失われてしまい、表現の発展・展開が生じづらいこと、特に特定の表現に焦点を当て、それをさらに発展させていく取り組みが生じづらいことが明らかになっている。これらは共に研究1、研究2で示唆された自身の感覚や周囲の状況に着目し、刺激を受けながら対応していくことの重要性、そしてそれらの刺激の中でも音楽や体性感覚情報の持っている重要性を示唆したものであると考えられる。

研究4の成果

研究4では、研究1から研究3までの知見を考慮したダンス表現教育プログラムを開発し、それを総合大学の授業にて実施した。授業前後に行った質問紙や、特定のワークにおけるダンスパフォーマンスの変化、各授業におけるコメントシートなど複数の観点から分析を行った結果、授業に参加したことで、ダンスパフォーマンス自体が向上したことに加え、ダンスや芸術表現に対する抵抗感が減少し、より興味・関心を抱くようになったこと、自身の身体や周囲にある環境、他者に対してより注意を向け、多様な観点から捉え直すようになったこと、その結果として自己発見やコミュニケーションが促進されたことが示唆された。実施した通常授業、集中講義双方とも類似した結果が示されていた。以上のことから、開発したダンス表現教育プログラムが、学生の芸術表現への興味・関心だけでなく、日常生活にも影響を及ぼす効果的なものであり、そのことをデータに基づいて実証的に示した点、そして総合大学における芸術表現教育の有効性について明確な示唆を与えた点を、研究4の成果として挙げる事が出来る。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

清水大地・岡田猛(2013) ストリートダンスにおける即興的創造過程, 認知科学, 20(4), 421-438, 査読有.

清水大地・岡田猛(2015) ブレイクダンスにおける技術学習プロセスの複雑性と創造性, 認知科学, 22(1), 203-211, 査読有.

中野優子・岡田猛(2015) コンテンポラリーダンスにおける振付プロセスの解明, 舞踊学, 38, 43-55, 査読有.

Hirashima, M., & Oya, T. (2016) How does the brain solve music redundancy? Filling the gap between optimization and muscle synergy hypothesis, Neuroscience Research, 104, 80-87, 査読有.

〔学会発表〕(計17件)

学会発表

清水大地・岡田猛(2013). ブレイクダンスにおける踊りの習得とその発展. 2013年度人工知能学会全国大会(第27回), 富山国際会議場, 2013年6月4日-6月7日

Shimizu, D., & Okada, T. (2013). Physical Skill and Idea Interaction in the Creation of New Dance Movements. *Proceedings of the 35th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*. Berlin, Germany. July 31- October 3.

Nakano, Y., & Okada, T. (2013). The Process of Creating Choreography in Contemporary Dance. *Activating Inspiration & Creativity*, Tokyo, Japan. November 9-10.

清水大地・岡田猛(2014). 他者と踊り合うことがブレイクダンスのパフォーマンスにもたらす変化. 2014年度人工知能学会全国大会(第28回), 愛媛, 5月12日-5月15日.

Rutkowski, T. M., Nakano, Y., Shimizu, D., Struzik, Z., & Okada, T. (2014). Brain Correlates of Creativity - ERP and Time-frequency Creative Insight Responses Analysis. *The 37th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society*, Yokohama, September 11-13.

清水大地・岡田猛(2014). 身体表現芸術における技術の学習プロセスに見られる多様性. 日本認知科学会第31回大会, 名古屋, 9月18日-9月20日.

清水大地・岡田猛(2014). ストリートダンスに対する大学生の評価. 日本教育

心理学会第56回総会, 神戸, 11月7日-11月9日.

中野優子・岡田猛(2014).「ダンサーとして生きる」とはどういうことか-Anna Halprin氏へのインタビュー. 第66回舞踊学会, 東京, 11月29日-11月30日.

清水大地・岡田猛(2015). ブレイクダンスにおけるパフォーマンスの分類とその有効性. 2015年度人工知能学会全国大会(第29回), はこだて未来大学, 2015年5月30日-6月2日.

Shimizu, D., Okada, T. (2015). Deliberate Practice Revisited: Complexity and Creativity in the Practice Process in Breakdance. *Proceedings of the 37th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*. Pasadena, California, USA. July 22-25
Nakano, Y., & Okada, T. (2015). The Process of Creating Choreography in Contemporary Dance: A Case Study of the Choreographer Kaiji Moriyama. *2015 World Dance Alliance America Conference and Festival*, Hawaii, USA. July 26-31.

清水大地・岡田猛(2015). 大学生の抱くストリートダンスに対する印象. 日本教育心理学会第57回総会, 朱鷺メッセ, 2015年8月26日-8月28日.

清水大地・岡田猛(2015). ブレイクダンスにおける即興的な対応方略とその要因. 日本認知科学会第32回大会, 千葉大学, 2015年9月18日-9月20日.

中野優子・岡田猛(2015). コンテンポラリーダンスにおける振付創作プロセス. 日本認知科学会第32回大会, 千葉大学, 2015年9月18日-9月20日.

中野優子・清水大地・岡田猛(2015). 大学生を対象とした即興ダンス授業実践の教育的効果 - 表現活動や日常生活における学生の心理的変容に着目して -. 第67回舞踊学会, 福島大学, 2015年12月5日-12月6日.

中野優子・清水大地・岡田猛(2016). 総合大学における身体表現教育の実践とその効果-コンテンポラリーダンスにおける即興表現に注目して-. 文科省科研費助成研究「コンテンポラリーダンスのワークショップと即興の分析による舞踊美学の再構築(代表 貫成人)」平成27年度 第二回研究集会, 東京, 2月9日.

Nakano, Y., Shimizu, D., & Okada, T. (in press). Classroom practice and its educational effects in an improvisational dance course for undergraduates: Focusing on problem finding and communication skills. *The 31st International Congress of*

Psychology, Yokohama, Japan, July 24-29.

〔図書〕(計1件)

中野優子・岡田猛(2016) 駒場博物館ダンスワークショップ「博物館で踊ろう! からだで鑑賞?」の実践とその効果 - 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛(編著) 触発するミュージアム- 文化的公共空間の新たな可能性を求めて-. pp.149-162, あいり出版.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

岡田猛研究室ホームページ:
<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/okadalab/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 猛 (OKADA, Takeshi)
東京大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 70281061

(2) 研究分担者

平島 雅也 (HIRASHIMA, Masaya)
国立研究開発法人情報通信研究機構・研究員
研究者番号: 20541949

(3) 連携研究者

野崎 大地 (NOZAKI, Daichi)
東京大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 70360683

スツルジク ズビグニエフ (STRUZIK, Zbigniew)

東京大学・教育学研究員
研究者番号: 10422388